

---

# 白紙の地図と高校生のP G C ~ half red eyes ~

白凧 黝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白紙の地図と高校生のPGC \ half red eyes \

### 【Nコード】

N7675Y

### 【作者名】

白凧 黝

### 【あらすじ】

2055年。

世界の地図は白紙に帰った。

終わりの見えない不況が、第3次世界大戦を引き起こしたのである。連合も同盟も無い己の利権のみを求めた2050年から約5年にも及んだ大戦は、世界各国と国境を消し去った。

終戦から約20年後の2075年。

第4都市と言う名に変わった日本――の極々一部は、先の大戦で

権力を握ったPMC（民間軍事会社）に因って、統治されつつあった。

だが、PMCが権力を握る前。崩壊していたかつての日本の治安を守っていたのは、PMCと同時期に設立された、PGC（民間警備会社）だった。

これは、かつての日本のとある街――半径十キロの世界の中で様々な思いを抱くPGCの少年少女達の物語。

## プロローグ1（前書き）

初めまして。

白屈 黝と申します。

このような形で、小説を掲載するのは、初めてで、駄文かも知れませんが、生暖かい（？）目で見守って頂けたら幸いです。

尚、私は学生ですので、考査などで更新が遅れる場合がございますが、ご了承下さい。 m（――）m

## プロローグ1

「ーハア、ハアー」

夜の闇に沈む閑静な住宅街。

その街中を息が切らしながらも少女は走っていた。

少女を動かしている原動力。

それは『恐怖』と言う名の感情と死にたくない、と言う思いだった。その二つが今にも立ち止まってしまいそうな少女を必死に支えている。

後ろを振り返ると追手はーー刃物を持った男は、まだ少女を追いつけ続けていた。

「なん、で…」

何かをした訳でも無い。

何時も通りの日常だった。それなのに、何故。

自分が、『通り魔』の餌食として選ばれてしまったのか。

走って、走って、走って。辿り着いたのは、行き止まりだった。

防犯意識の高さからか、行く手を阻む壁は高く、少女に取って乗り越える事など不可能だった。辿り着いたのは、行き止まりだった。

行く手を阻む壁は防犯意識が強いのか、異常に高く、乗り越える事は、不可能に近い。

こんな結末を、運命を、少女は呪った。

壁にもたれて座り込んでしまった少女に男が近寄って行く。

死に間際の走馬灯。

その言葉が本当で有ったと、少女は身を持って体験していた。僅か十数年の人生。

その一コマ一コマが、ゆっくりと流れていく。

男が刃物を持ち直したのが見えた。

少女は目を固く閉じ、来るべき『死』に備えた。

――数瞬の後。

辺りに紅の飛沫が飛び散った。

## プロローグ1（後書き）

コメントなど頂けたら嬉しいです。

## 白紙となった地図（前書き）

プロローグ1の塀の描写が二回重なっていました。  
申し訳ありません。

m ( ) m



## 白紙となった地図

初春にしては冷たく感じる、屋上の乾いた風。

その風に髪を揺らされ、風見一希はうつすら目を開けた。

一希は立ち上がり、体を反らす。パキパキと鳴る体は、長い間一希が其処に座り込んで居た事を示していた。

日の光を吸収しているかの様な漆黒の髪。

制服に身を包んだ体は、高校生にしては、背丈が高めだった。

一希はゆつくりと柵の側に歩み寄る。

この高校――私立月下高校の屋上からは、街が一望出来た。

否――街、ではなく世界、か。

半径10キロの円を描く壁。その中の街が、一希に取っての世界だった。

今から約25年前。

まだ、一希も生まれていない頃――

世界を巻き込んだ最後の戦争が有った。

第3次世界大戦。今ではそう呼ばれている。

事の発端は、たった一回の発砲だったらしい。

テロ行為が激化していた中東、其処のテロリストが治安部隊に対して行った威嚇射撃が命中。

それが発端となったテロリスト対治安部隊の戦いは泥沼化。

次第に戦火は中東各国に飛び火。

いつの間にか、テロリスト対治安部隊の戦いは国家対国家と言う状態となっていた。

普通ならば、この辺りで国連か何処かの機関が仲介し、終戦へと戦局は向かっていっただろう。

だが、そうなる事は無かった。

中東での戦争に乗り、中国、ロシアがあらゆる利権や資源を求め、アメリカ、東南アジアに侵攻した為だった。

2008年頃に起こった金融危機。それは、一時的に収まったものの、完全に収まる事は無かった。

更に、中東で戦争が始まった事で、只でさえ少なくなっていた石油などの資源が枯渇。

経済的な利権・資源を求め、戦争が勃発するのも、無理は無い状態だったらしい。

そして、それに続くかの様に、アジアは勿論、南米、北米、アフリカ、ヨーロッパ…あらゆる国が、互いに宣戦布告し、第3次世界大戦が始まった。

日本も例外では無かった。各国の軍隊の前に自衛隊は壊滅。民間人軍人問わず、死者は計り知れない。

大戦は始まって約五年で終結したが、別に各国が自らの愚行に気が付いた訳では決して無い。軍資金・兵力の消滅、他国の侵略に対する全面降伏、そして、戦略型核兵器の使用など様々な要因で、戦争を行う国家自体が消滅してしまったからだった。

家族や住む場所を失い、生き残った人々は、二度とこのような事を繰り返さないように、と2055年に互いに永世中立を誓い、自衛力以外の一切の武力を放棄した。そして、世界各地に11核兵器の影響が比較的少なかった場所に11五つの都市を作りそれぞれに第1〜第5と都市に番号を割り振った。

国境が消え、世界地図が白紙になった瞬間だった。

だが、国境が消えたとは言っても、集団には、統治者が必要だった。人に人は支配出来ない、とは良く言った物だが、統治者が必要というのは、なんという矛盾だっただろうか。かつて日本であった場所

に位置する第4都市の支配権を手に入れたのは、自衛隊が壊滅した後、日本を辛うじて壊滅から守りきったPMCだった。PMCに因って統治されている日本——第4都市の治安は、表向きには、PMCが統治しているからこそ、治安が保たれていると一般人には思われている。

そう、表向きには。

都市を眺めて居ると、ズボンのポケットに入っていた携帯が震え出した。一希は携帯を取り出すと、ディスプレイを一瞥、受話器のボタンを押して、耳に当てた。

「——何だよ、舞無（むな。）さん。」

「久しぶり、一希君。元気？」

その声には、僅かな笑いが含まれていた。

「舞無さんの声聞くまでは元気だったよ。」

聞くまでは、を強調し、一希は答えた。

「……まあ、そんな事はどうでも良いわ。それで。」舞無の声色が変わった。

例えるならば、冷たく冷えきった、鋭利な刃物。

「『依頼』か？」

それに合わせ、一希も声のトーンを落とす。

「そう。急で悪いと思うけど、今から事務所に来てくれない？」

「分かった。今から行く。」

一希は通話を切った。

そして、鞆を手にする——

柵を乗り越え、屋上から飛び降りた。

## 白紙となった地図（後書き）

テスト期間中に、小説書いて投稿する私は異常…？  
感想など有りましたら、宜しく願いします。

タイトル修正のお知らせ

「白紙の地図と高校生のPGC」

へと、近日中に変更します。

ご迷惑をお掛けし、申し訳ありません。

事務所へ依頼（前書き）

遅れてすみません。

今回はちょっと長いのと、審査期間なので遅れました。

## 事務所へ依頼へ

落ちていく。

制服の裾が風で暴れ、耳を風切り音が支配した。

屋上から地面までの距離は、十数メートル。

その高さから飛び降りたのだとすれば、只では済まないだろう。

だが、一希の顔には焦りや恐怖などは、浮かんで居ない。

地面まで数メートルを切った所で、一希は足を曲げ、衝撃に備えた。

――ダンッ

数秒後には、一希は土埃に巻かれながらも、平然と地面に立って居た。

第四都市は大まかに六つのブロックに区分されている。

主に行政機関が集まる中央のブロック。

商店が集まる東のブロック。

農場が広がる西のブロック。

住宅街の南のブロック。工業地帯の北のブロック。

そして――今、一希が歩いている、繁華街の北東のブロック。

別名『捨てられた街』。

このブロックだけには、第四都市の統治者であるPMCも関わろうとしない。だが、第四都市の嫌われ者達や、何らかの事情で、身を隠して居る者達が集まるこのブロックは、他のブロックに比べても、明らかに活気に満ちていた。

一希は五月蠅い雰囲気は好きではない。

だが葬式のような、重い雰囲気も嫌いだった。

静か過ぎず、五月蠅すぎず――それが、一希の最も好きな雰囲気

気だった。

北東のブロックに入り、歩くこと数分。

一希は、三階建ての雑居ビルの前に居た。ビルの壁面はひび割れ、仮に地震が来たら、数秒で倒壊してしまいそうだった。

正直、この中に入る事に一希はかなりの躊躇いが何時も有ったが、今では気にしない様になっていた。

だから、入り口の階段に足を掛けた時、頭上から僅かにコンクリートの欠片が混じった埃が降ってきて、一希は気にしなかった。否、気にしなくなかった。

二階に上がると、壁の雰囲気全く合っていない扉が有った。

扉には、筆記体で『Tukisita Private Guard Company』と綴られていた。

今にも倒壊しそうな、雑居ビルの二階。

此所が、一希が所属するPGCの事務所だった。

扉を開けると、一人の少女が、デスクの上で書類を広げていた。

「案外早かったわね、一希君。」

書類から目を離し、一希に目を向ける月下高校の制服を着た少女。彼女こそが、一希の雇い主であり、月下民間警備会社の社長、月下舞無。

因みに、舞無の祖父は『月下』と言う名字の通り、一希達が通う私立月下高校の理事長だ。

舞無自身も生徒会長の地位に就いて居る。

「舞無さんが早く来いって言うから急いで俺は着たんだが。」

肩をすくめ、一希は事務所の隅に置いてある自分のロッカーを開く。

その中には、防弾チョッキ、拳銃など、この仕事には欠かせない物が詰め込まれていた。ロッカーは全部で三つ有ったが、使われているのは、二つだけだった。

「で、依頼って何だよ。また、殺し合いか？」 実際、これの  
つ前の依頼が、ヤクザの掃討だった。

「違うわよ。何時も何時も、そんな血生臭い依頼ばかり受けた  
りしないわ。」 それを聞いて一希は、自分が銃を使う必要が無かつ  
た依頼は何れ程有ったかを思い出そうとしたが、止めた。

そんな事、指で数えられる程しか無かったからだ。 如何わしい  
視線を舞無に向かって照射していると、突如、何の合図も無しに扉  
が開いた。

刹那――

一希は、拳銃をホルスターから抜くと、銃口を扉に向ける。

この事務所に来る人間は多くない。 もし仮に依頼人であったな  
ら、扉の脇に有るチャイムを鳴らすか、ノックをしている筈だ。

一希が、チャイムを鳴らしたり、ノックをしなかったのは、予め  
舞無に呼び出されて居たので、舞無が来訪を知っていたからだ。

となると、敵か味方が。 当然だが、一希は恨みを買わずに今  
まで生きてきた訳ではない。

P G Cと言う職業柄、何時鉛玉が飛んできてもおかしくないのだ。  
だが、今回扉の向こうに現れた答えは、後者だった。

「……随分、物騒な歓迎ですね……」

その声と姿を認知した瞬間、一希は脱力し、銃口を下げた。

「舞無さん……どうして、雪華さんも来ると言ってくれなかったん  
ですか……？」 扉の向こうで困惑した表情で立って居たのは、一希  
と同じく月下民間警備会社に雇われて居る、彩萌雪華あやめせつかだった。 月  
下高校の制服を着て、長い髪を後ろで束ねた彼女は狙撃銃を背負つ  
ていた。

「いや、今から言おうと思ってただけ……来るのが予想外に早  
かったわ……」 呆然とする舞無を尻目に、狙撃銃を下ろした雪華は、  
小型のアタッシュケースを床に置いた。

「これが、今回の報酬です。」

ケースを開けると、札束が、二つ――200万円程入って居た。



「…ああ、有り難う、ご苦労様、雪華。」

混乱から回復した舞無がそう言つと、雪華は窓枠に腰を下ろした。一希も、近くの椅子に腰を下ろす。「さて、今回の依頼は、護衛よ。」

二人が座るのを待つて、舞無が切り出した。

「護衛、ですか？」

雪華が意外だと言う様に聞き返す。

「ええ。最近、女子高生が通り魔に殺されていると言うニュースを聞かない？」

「ああ…」

そう言えばそんな事を聞いた事が有る様な気がするな、と一希は思った。

「…でも、何で一希さんと私の二人が呼ばれるんですか？護衛なら、狙撃銃しか扱えない私より、拳銃が扱える一希さんの方が良いんじゃないですか？」

「それなのよ。」

舞無は溜め息を吐き、続けた。

「これが民間人からの依頼だったら、ね。」

「その言い方は、まさか…」

一希には、嫌な予感しかしなかった。

「ええ、今回の依頼人は、PMCよ。」

第四都市の治安は、PMCが守って居る。

一般人の常識は、そうだ。

それは確かに嘘では無い。

実際に、殺人事件等の捜査を行うのは、PMCだ。だが、稀に、PMCが手に負えない犯罪が発生する事も有る。

そんな時、PMCは、多額のコネで、密かにPGCに依頼をする。否、依頼をする、と言うよりは、丸投げする、と言った方が正し

いか。

依頼の内容は様々だ。

今回の様に、護衛をする事で、次の被害を食い止める為の物や、明らかな殺戮行為等のPMCが出来ない『黒い』仕事等々…

少なくとも、全て命を賭ける必要が有る仕事ばかりだった。

そして、仮にPGCの人間が依頼の最中、犯罪者等を逮捕したとしても、一般に知られる事は無く、全てがPMCの手柄としてマスコミには、伝達される。

PMCに因る第四都市の統治は万全だと、知らしめる為に。

その代わりと言うのも何だが、PGCの社員には、銃器の所持、使用等の、多くの権限が与えられていた。

人の殺害、と言う一点を除いては。

「つまり、PMCが依頼してきたから絶対に失敗する事は出来ない。だから、念には念を入れて、俺と、雪華さんの二人にこの依頼に取り組んで貰う…そう言う事ですか？」

「流石ね、一希君。物分かりが良くて助かるわ。……なら、二人共、明日から此れで頼むわ。」

妙な早口と共に差し出されたのは――制服？

いや、只の制服だったらまだ良い。

それは、男子の物と形状が多少異なっていて、下は……スカート？

「あの…もしかしてこの制服って…？」

雪華が恐る恐る問う。

それに対して舞無は、わざとらしく視線を反らした。

だが、一希は逃がさず舞無を追撃する。

「女子高の制服ですよね。」

それは、月下高校の姉妹高校、逆瀬女子高の制服だった。

「……安心しなさい。……只だったから。」

遠い目をしながら舞無は言ったが、勿論そう言う問題では無い。

「舞無さん。…俺、男なんですが。」

「そのくらい、見れば分かるわよ。」

即答だったものの、声は僅かに小さかった。

「まさかとは思いますが……護衛対象が、逆瀬女子高の生徒で、俺達に女子高に潜入しろ、とか言うんじゃないですよね。」

「……」

舞無の沈黙が、肯定を意味して居た。

一希は、雪華が来るまで舞無が依頼内容を話そうとしなかった訳が分かった気がした。

…雪華にフォローを頼む為だ。

その証拠に、さつきから舞無は視線で雪華に救援信号を送っている。

その救援信号を受け取った雪華は、困惑半分、哀れみ半分、という様な表情で口を開いた。

「まあまあ、一希さん。一度着てみたらどうですか？一希さん自身の素材も良いですから、案外似合うかも知れませんか？」

「いや、仮に似合ったとしても嬉しく無いですよ！！」

全くフォローになって居なかった。

と言うか、何処の世界に、女装が似合って喜ぶ男子高校生が居るんだ。いや、仮に居たとしても、もうそいつは確実に末期だろう。精神的な意味で。

「でも、仕方ないじゃない。偶然この学生が当たっちゃったんだし。」

「舞無さんが開き直ってどうするんですか！？」

数分後。

一希が折れた――

舞無が実際に、PMCから来た依頼書を一希に見せ、雪華が仕事だからしょうがない、と必死にフォローした結果だった。

こうして、一希と雪華は、逆瀬女子高に潜入、護衛の任務に当たる

事  
と  
な  
っ  
た  
。

## 事務所へ依頼へ（後書き）

注意……作者に女装癖は無いです。

一希が持つ拳銃と雪華の狙撃銃の名前募集します。コメントなどでお願ひします。

まあ、コメントなかったら作者が考えますが…

ご感想、ご意見、お待ちしております。

## 二人の『かずき』（前書き）

考查が終わりました。

これからは、四日に一回位のペースで更新したいと、考えております。

## 二人の『かずき』

「このド変態。」

南ブロックの住宅街、其処に位置する一希の自宅。

事務所から帰って来た一希に対しての家人の第一声は、お帰り、など優しい物では無かった。

まあ元々、この家人にそんな台詞は期待していなかったのだが。

「帰って来るなり、いきなり酷いな、一姫……」

風見一姫。

それが一希の唯一の家族であり、たった一人の妹の名前。

ところが、兄妹にしては、容姿はかなり異なってる居た。

只一点を除いては。

「何で女子高の制服を持って帰って来た変態に普通に接してやる必要が有るんですか。」

「兄を変態呼ばわりするな！！それに、これは俺が望んで持って帰って来た訳じゃねえ！！」

一姫に変態呼ばわりされる原因となった、逆瀬女子高の制服が入った袋を振り上げ、一希は叫んだ。

すると一姫は哀れみを込めた目で言った。

「ああ、PGCを首になつて、今度はオカマバーにでも就職するんですか。良かったじゃ無いですか、直ぐに再就職出来て。」

「……………」

一生、この妹には舌戦で勝てないのだろうな、と一希は確信した。

「ところで兄さん。」

「何だ？」

「何時まで靴を履いて玄関に立ってる積もりですか？」

一希は未だ、玄関から上がれて居なかった。

夕食を食べた一希達は、テレビでニュースを見ていた。

今日もニュースは事故だの殺人だの、どうでも良い事ばかりを喋って居る。一希も一姫も、どんなニュースにも眉一つ動かさない。

一希は、ふーん、位にしか思わないし、一姫に至っては何とも思っ  
て居ないだろう。

人の一人や二人、傷付く事など、当たり前だと知っているからだ。

この世に於いて、『幸せ』と『不幸』の総量は常に一定だと二人は  
思っている。誰かが幸せになれば、誰かが必ず不幸となる。

故に、誰もが幸せな世界など存在しない。

何故なら、この世界では、身長や体重と言ったステータスですら、  
不幸となつて自らに降り掛かつて来るのだから。

一希はP G Cの仕事の中で、一姫は学校で、それぞれそれを知った。  
否、自らの身を持って体験した。

だから、ニュースを一希は同情もせず流すし、一姫は只それを『  
情報』として処理していた。

ニュースが終わると、二人はテレビを消した。

バラエティー番組にも、ドラマにも二人は全く興味が無い。

だから、二人は芸能人の名前など一人も知らない。

だが、その所為で、二人の生活に影響が出た事など無かった。なぜ  
なら、一希の数少ない友人も芸能人関連の話は苦手な有ったし、一  
姫には、一希やその知り合い以外に会話する相手すら居なかったか  
らだ。

テレビを消すと、一姫は戸棚から目薬を取り出し、目に差した。

「やっぱり痛むか？」

一希は目を閉じて居る一姫に声を掛けた。

「少し痒い程度です。問題有りません。」



そう言ってから開かれた一姫の両目は――紅に染まって居た…

一姫だけでは無い。

一希の右目も、紅に染まって居る。

勿論充血などでは無い。

もし充血なら、虹彩まで紅に染まる筈が無い。

医師に診てもらった事も有るが、詳しい事は分からなかった。

では、何時からこうなってしまったのか。それも定かではない。何故なら、二人には、五年から前の記憶が全く存在しないからだ。

一希に取っての最初の記憶は、この家の居間で、目覚めた事だった。

分かって居たのは、自分の名前と、両親は居ない事、そして、一緒に倒れて居た少女が妹の風見一姫だと言う事だけだった。

自分の右目と一姫の両目が紅いと気付いた事、月下舞無や彩萌雪華と出会ったのは、少し後の事である。

目覚めてから五年間、二人は必死だった。  
生きる事に。

両親と言う名の庇護者は二人には居なかったので、生きる為の金は自分達で稼ぐしか無かったのだ。

結果、一希は高校生の身でも大金が稼げるPGCの社員になり、一姫は家事でそれをサポートする。どちらかが、成り立たなくなれば、どちらも成り立たなくなってしまう関係。

信頼し、協力はしているが、互いに過度な依存はしていない兄妹の関係が、磐石な物に見えるか、不安定な天秤の様に見えるかで、この兄妹の見え方は随分と違うだろう。

一姫の目に支障が無い事を確認した一希は、二階の自室へ向かった。最低限の家具しか置かれて居ない部屋には、僅かな火薬の匂いが漂って居た。

一希はデスク脇の椅子に座ると書類を――事務所で、舞無から貰って来た依頼書を読み始めた。

今まで、一希が高校生と言う身で、数々の依頼を達成してきた原因の一つは、この情報整理に有る。

何をすれば良いのか、その為には、どんな武装で、どう動けば良いのか。不測の事態には、どう対応すれば良いのか。綿密なスケジュールを頭の中で組んでいく。

特に今回は、周囲にバレたら其処で終わりなので、何時にも無く一希は真剣だった。

幾ら渋ったとしても、やると決めたなら、真剣にやる。

それが依頼に対する一希のやり方だった。

書類を読み終え、情報を整理した一希は、部屋を出ると、向かいの一姫の部屋のドアをノックした。

「はい。」

「俺だ。入っても良いか？」

以前、ノックだけして入った時、酷い目に遭った事が有ったのでそれ以来一希は絶対に声を掛ける事になっている。

暫くごそごそと音がした後、答えが返って来た。

「どうぞ。」

開けた先には、一希の部屋と同じ様な飾り気が無い、最低限の家具しか置かれて居ない部屋が有った。

違う所が有るとすれば、一姫の部屋に置いて有るベッドが、一希の部屋には無いと言う事位だ。

一姫は、ベッドに腰掛け、小説を読んで居た。

「何の用ですか、兄さん。」

冷めた視線は相変わらず小説のページに落とされて居たが、一希は全く気にしない。

「いや、頼みが有るんだが。」

其処でやっと、一姫は顔を上げた。

「頼み？兄さんが私にですか？」

「ああ。……お前の名前を明日から貸してくれ。」

「は？」

全く予想して居なかった言葉に一姫は、豆鉄砲を喰らった様な顔を  
した。

「いや、明日から、逆瀬女子高等学園に潜入するんだが」

「変態。後却下。」

「何でそうなる！？」

最後まで言わせて貰えず、即答で返答と侮蔑の言葉の両方を貰った  
一希は、事情を知らない第三者から見れば確実に変態だった。

「覗きとかする為に潜入するんでしょう？ 確実に変態以外の何物で  
も無いです。」

「お前は俺をどんな風に見てるんだ！？」

「犯罪者。」

そう言つて一姫は携帯を弄り始めた。番号を押している事から掛け  
ようとしているのは…

「何通報しようとしてる！？」

「覗き魔の未遂の摘発ですけど。」

「違う！ 良いか、一姫。俺は明日から護衛任務で、転校生として、  
逆瀬女子高に潜入するんだ。雪華と一緒に。だけど、そのままの  
名前じゃ不味いだろ？ だから、俺はお前の名前を貸してくれって言  
いに来た。これで良いか？」

「……『依頼で』と言つ言葉を付け加えて居ない兄さんが悪いんで  
すよ。」

「……日本語って難しいね」

はぐらかそうとする一希を一姫は追撃する。

「逃げないで下さい、それは只の現実逃避です。」

「……で、答えは？」

溜め息を吐くと一姫は言つた。

「……余り、多様しないで下さいよ。」

「……悪いな。」

「仕方ないですよ、私達が生きる為ですから。…でも。」

「何だ？」

部屋を出ようと、一姫の言葉を背中であいていた一希は立ち止まり、振り返った。

一希の視線の先、其処には、さっきまでの冷めた視線から一転し、不安を視線に混ぜた一姫が居た。

「絶対に、無理だけはしないで下さい。」

それは、何度でも一希を変態呼ばわりする一姫の本心。

自分の為に、傷付かないで欲しいと言う、願い。

「……ああ、分かってる。」そんな一姫に対して、一希に出来たのは、言葉を返す事だけだった。

「じゃあ、兄さん。おやすみなさい。」

「ああ、良い夜を。」

そう言って、一希は部屋を後にした。

## 二人の『かずき』（後書き）

### タイトル修正

『白紙の地図と高校生のPGC\half red eyes』  
に、投稿日から、一週間後12月8日に変更します。  
ご迷惑をお掛けします事を、お詫び申し上げます。

コメントをお待ちしています。

## 逢魔の時（前書き）

短いです。

## 逢魔の時

浅い眠りと深い眠り。

それらを繰り返す内に、気が付けば夢を見ていた。

夢だと分かる夢、つまり明晰夢と言う物を見ているらしい。

紅蓮と黒。

それが視界を埋め尽くす全てだった。

パチパチと何かが爆ぜる音と、怒号が聞こえる中で、黒煙や熱気が、身体を覆って行く。

目の前は、炎が支配していた。

逃げないと。

だが、その思いとは裏腹に、身体はその場から動かない。

パチパチと言う音に彩られ、全てが等しく炎の前で灰に変えられて行く光景。

此処が地獄で無いのなら、何処が地獄だと言うのだろう。

煙を吸い込み、激しく噎せた彼は自らの死を覚悟した時だった。

「ほら、起きて。」

声が出たが、彼は反応しなかった。

それが死に間際の自分に、掛けられた声だと分からず、幻聴だと思っていた。

だから、

「其処の貴方。起きて。」と、再度声を掛けられる迄、彼はその声に反応しなかった。

そして、その声が自分に向けられた物だと分かったとしても、彼は反応しなかった。

否、出来なかった。

彼の意識は既に深い闇の中に沈み掛け、声を出す事すら、叶わなか

ったのだから。

声の主は暫く黙って居たが、やがて溜め息を吐くと言った。

「まだ、貴方は死ぬべき人間じゃ無い。けれど、私に貴方の生死を決める権利は無い。だから、選びなさい。此処で灰になるか、それとも、私の手を取って生きるか。」

最早、身体一つ満足に動かせない彼に向かって、彼女は手を差し出した。

其処から先は、分からない。

「……また、出やがった。」

夢から目覚めた一希は、壁に掛けられた時計に目をやる。

夜光塗料が塗られた針は、午前二時を示して居た。

何時もの様に椅子に座って眠って居た一希は、電気を付けた。

屋上から飛び降りる勇氣は有れど、悪夢を見て二度寝する勇氣は、

一希には無い。

一希は、寝る前に側に置いた鞆を引き寄せ、ファスナー開ける。

一見すると、外見中身共に一学生の鞆としか見えないそのの底板を

一希は外した。

底板の下、其処には拳銃が収められて居た。

取り出した拳銃を一希は手で弄ぶ。

悪夢に起こされた時や、どうしても眠れない時に、武器を弄ぶのが、

一希の癖だった。

一希に取つての睡眠は、それほど大切な物では無い。少なくとも、身体が拒否したのならば、無理にするべき事でも無かった。

紅と黒。

左右非対称の色をした目で拳銃を見つめながら、弄ぶ。



そうして居る内に、何時の間にか夜は更けて行き、護衛一日目の朝が来た――

## 逢魔の時（後書き）

コメント、感想等、お待ちしております。

護衛二日目　く邂逅く（前書き）

寒くなって来ましたね

作者は寒いのが苦手です。土日は常に引きこもりです。

## 護衛一日目　く邂逅く

私立逆瀬女子高等学園。

通称、逆瀬女子高。

第四都市でも、一、二を争う設備と、歴史を誇る高校。

中央に聳え立つ時計塔が、この高校のシンボルとなつて居る。

その時計塔の足元――時計塔広場には、逆瀬女子高の制服に身を包んだ雪華が立つて居た。

回りを同じ制服を着た他の生徒達が通り過ぎて行く中で、雪華は腕時計を約一分置きに見ていた。

「遅いですね、一希さんは…」

そう言つた後、雪華は、傍らに立つもう一人の少女を見た。

彩萌雪華ともう一人の少女が其処で立ち止まって居る訳。

それは――

「本当にどうしたんでしよう、一希さんは。」

今日から共に任務に当たる一希が、待ち合わせの時間を過ぎても、現れないからだつた。

雪華と少女が待つて居る逆瀬女子高から、約五十メートル離れた地点の歩道。

其処を一人の少女が駆けていた。

否、少女では無い。

「まさか、準備に手間取る何て…」

声すら変わつて居たものの、その顔には僅かな面影が残つて居る。そう、一希だつた。

一希が遅刻した理由は簡単。

思つて居たよりも、メイクに手間取つてしまつたからである。

だが、遅刻しそうになるまで、時間を掛けたお陰なのか、一希は、すれ違つた人間十人中九人ほどが振り返る程の美少女に変貌して居

た。

雪華と、護衛の対象者に対する、お詫びの言葉と言いつきを考えながら、一希は校門を走り抜けた。

「――悪い、遅れた。」

既に人通りの少なくなった待ち合わせの場所には、当然ながら二人の姿が有った。

一人は言うまでも無く、彩萌雪華。

雪華は、長髪を何時もの様に軽く纏め、伊達眼鏡を掛けて居た。

足元には、恐らく狙撃銃が入って居るであろう楽器ケースが置いて居た。

そしてその隣に、一人の少女が立って居る。

背は低めで、一希よりも僅かに背が低い雪華よりも、更に低い背丈だった。

髪は、背と同じ様に短い。目は、何処か小動物的な印象を二人に与えた。

今まで彼女を見て、童顔――と言う言葉を浮かべたのは、一希だけでは無いだろう。

中学生と言われても頷ける様な容姿だった。

昨夜、資料で写真を見て把握はしていたが、一希は自己紹介を兼ね、本物であるか確認する事にした。

「遅れてすみません。月下P G C事務所の風見一希と言います。今日から、其処の彩萌雪華と共に、貴方の護衛に就かせて貰います。」

隣の雪華も一希に合わせ、頭を軽く下げる。

「あつ、すみません。私は、古手毬こてまり彗すいと言います。今日から宜しく願います。」

幼そうな外見とは、裏腹に、意外としつかりした性格の様だと一希は思った。

互いに自己紹介を終えた時、頭上の時計塔の鐘が鳴り出した。

「始業十分前ですね。…えっと、お二人は、理事長に挨拶しに行く

んですよね？」

「はい。」

「分かりました。理事長室は、一番校門から近い管理棟の二階の一番奥です。では、後程教室で。」

そう言つて慧は校舎の入口へと駆けて行つた。

慧が、校舎の中へと消えるのを見届けた後、雪華が切り出した。

「意外に、遅かったですね、一希さん？」

雪華は以前にも一度、一希の女装を見ているので、その変貌に大して動揺していなかった。

「メイクに手間取っただけだ。それよりも。」

一希は、困惑の視線を雪華に向ける。

「何で、舞無さんは、俺の服のサイズを知ってたんだ？」

その言葉の通り、一希の制服のサイズはぴったりだった。

「さあ…でも、舞無さんですから…」

そう返す雪華の制服のサイズも一希と同じ様に、ぴったりだった。

「あの人、プライバシーの権利って言う言葉を知って居るのか？」

「服のサイズがプライバシーに入るかは、結構難しい事でしょうけど…でも、知って居ると思いますよ。少なくとも、その言葉の意味は。」

二人して、溜め息を吐いた所で、一希はある事に気付いた。

「雪華さん、ペンダントは？」

何時も雪華は、写真が入るペンダントを掛けて居た筈なのだが。

因みに、写真の中身は、一希は勿論、一緒に暮らしている舞無でさえも見た事が無かった。

「ああ、あれは、制服の下に隠れる様に掛けてます。流石に、校則違反か分からない状態で、堂々と掛けて居るのもどうかと思いますから。」

そう言つて、雪華は、首筋の襟に隠れたチェーンを引っ張って、持ち上げて見せた。

その指先には、確かにチェーンが掛かつて居た。

「なら、行きますか。」

「そうですね。確か、校門に一番近い校舎でしたね。」

二人は歩き出したが程無くして、雪華が言った。

「思ってたんですけど、あの人、高校生、何ですよね…？」

どうやら雪華自身も、一希と同じ事を感じたらしかった。

広大な敷地を持つ、逆瀬女子高。

その理事長室に二人は居た。

部屋には、如何にも高そうな調度品が置かれており、物を僅かしか置かない主義の一希に取っては、居心地は余り良い物では無かった。思った所で、言う積もりは毛頭無いのだが。

「では、これから数日間、宜しく頼みます。」

そう理事長が締め括った時、見計らって居た様に、扉がノックされた。

「入りました。」

扉が開かれた先に居たのは、白衣を来た若い男性教師だった。

「ああ、丁度良かった篤君。ふたがみかがり紹介しよう。君達がこれから入って貰う二年A組の二神篤先生だ。」

「どうも、二神です。」

二神が頭を下げるのに合わせて、二人も頭を下げた。「なら、二神先生。後は任せましたよ。」

「分かりました。…なら行くか、えっと、風見に、彩萌。」

三人は、理事長室を後にした。

…一希達は気付いて居ただろうか。

理事長が冷たい目で、三人を見送った事に。

所は変わって二年A組の教室の前。

「えーっと、今日何か有ったと思うが…忘れた。」

あんた本当に教師として大丈夫か？と、二神の言葉が聞こえた一希

はー！少なくとも一希はそう思った。どうやら、二神は恐ろしい程やる気無しの教師の様だ。

「転校生が居るって聞いたのですが本当ですか？」

中から聞こえた声で、教室がざわざわとし始めた。

「あー、転校生ね。うん。居るね。二人も。：おい、入れば？」

普通其処は入れー、だろうと思ったが呆れ果てた一希には、何も言う気は起きなかった。

引き戸を開け、中に入ると、四十人の視線が照射された。

「えーっと：各々で自己紹介して席に座ってくれ。席は一番後ろの古手毬を挟んだ二席だ。向かって右側が彩萌、左側が風見だ。」

そう言くと二神は、教卓に突っ伏した。

二神もある意味凄いが、その教師の行動を平然と流す生徒達も凄いなと、一希は思った。

「風見一姫です。宜しくお願いします。」

「彩萌雪華と言います。宜しくお願いします。」

こうして、二人の任務は始まった。



護衛一日目　く邂逅く（後書き）

アクセス二百突破しました。有難うございます!!  
これからも宜しくお願い致します。

護衛一日目　ゝ異変ゝ（前書き）

お待たせしました。

## 護衛一日目　く異変く

転校生が転校して来た初日、最もよく有るイベントが有る。元々居た生徒――ークラスメイトからの質問責めである。

一時限目。

授業時間であるにも関わらず、二年A組の教室は喧騒に満ちていた。その喧騒の渦の中心は言うまでも無い。

「ねえねえ、風見さんって前は何処の高校に居たの？」

「彩萌さん、髪綺麗――！どんな手入れしてるの？」

一希と雪華だ。

そもそも、この臨時の質問責めが始まる事となつた発端は――ホワイトボードに『自習』と殴り書きし、教卓で居眠りする二神にある。

所謂、授業放棄だ。

先程のホームルームでもそうだが、二神の教師としてのやる気はゼロだと、一希は――正確には雪華もだが――確信していた。

こういう社会人を間違はなく、『給料泥棒』と定義するのだろう。だが、二人に取って今は二神等の事を考えて居る暇は無かつた。

「前は第4都市高に居て、両親の都合で此処に転校したんです。」

「えっ、髪ですか？そんな大した事はしてませんよ？」

二人とも、一対一、一対少人数の会話なら手慣れている。

だが、一対大人数の会話、それも、一方的な質問責めには慣れていない。

二神を気にするよりも、己に向かって来る質問に掛かりきりだった。故に、一時限目終了のチャイムが、試合終了のゴングに聞こえたのは、満更聞き違えでも無かつただろう。

顔を真顔に戻すと、筋肉が引き吊った感覚がした。

「……やつと、お昼ですか……」

「そう……ですね……」

一時限目が終了してから、質問責めは弱まったが、完全に収まった訳では無い。寧ろ休憩時間を狙って、他クラスの生徒達が、A組の面々に代わり、質問責めに來たのだ。

その為、二人は今迄……朝のホームルームから昼食時、屋上に來る迄、作り笑いを保つ必要が有った。

「月下じゃあ、あんな光景は有り得ないな……」

周りに人が居ない事を確認して、一希は口調を戻して喋った。

因みにこの高校では、屋上が解放されて居た。

だが、まだ時折冷たい風が吹く事も有ってか、屋上に一希達以外の人影は無かった。

「そもそも彼処では、私達は転校生では無いですからね。」

「この闘い、午後も続くと思うか？」

余り答えに期待せずに、一希は投げ掛けた。

「続くと思いますよ。寧ろ午後からの方が人が多いと思います。」

「誰かの救いの手とか、來ないかな……」

一希がそう呟いた時だった。

「お疲れ様です。」

その言葉と共にやって來たのは、彗だった。

手には、三本の紙パックを握って居た。

そして、その紙パックの二本を一希達に差し出して來た。

「すみません、有難うございます。」

「いえ、大した値段でもありませんし。」

一希は、素直にパックを受け取り、ストローを突き刺した。

ついでに、購買で購入したパンの包装を破き、一口口に運ぶ。

雪華や彗も、各々の昼食を口に運んで居た。

会話は無い。

一希も雪華も、基本積極的に話す方では無いし、彗も、何を話せば良いのか分からない。

だが、その沈黙が、二人に取つての本当の休憩になったのは、明らかだった。

「帰りの際の事なのですが。」

食事が三人とも終わつた事を見計らつて、雪華が切り出した。

「帰りは、何を使われますか？」

口調も先程一希と話して居た時の気を抜いた物から、変化して居た。「普段なら、徒歩なんですけど、今日から家の者に車を寄越して貰う事になつて居ます。…駄目でしょうか？」

「いえ、そちらの方が良いと思いますよ。徒歩だと、通り魔に襲われる確率は、恐らく上がるでしょうから。」

今迄に襲われ、殺害された被害者全てが、路上で殺されて居る。車を使う事は、『路上で襲われる』と言う前提を覆す事が出来るだろう。

だからと言つて、油断する様な甘さは、二人共持ち合わせて居なかつたが。

「お二人は、車でも、付いて来られるのですよね？」「ええ。指令に、『対象の帰宅の確認』と言う項目が有るので、一緒に帰宅させて頂く事になると思います。」

「そうですか。なら、宜しくお願いします。」

慧がそう言つて頭を下げた時、チャイムが鳴った。

「授業が始まりますね。急ぎましょう。」

一希は、生まれて初めてチャイムと言う物に、殺意を抱いた。

午後からの授業と、相変わらず激しい質問責めを潜り抜け、放課後がやって来た。

逆瀬女子高は部活動が盛んで、あれだけ群がつて居たクラスメイト達は、各々の部活へと去つて行った。

立ち去つて行く前に、クラスメイト達に、部活動に勧誘されたが、二人共、この学校には、学生生活を送る為に来ている訳では無い。

二人は適当な理由を付け、上手くあしらった。

彗は、この高校では数少ない『帰宅部』所属なので、遅く迄学校に残る事は無い。

最も、通り魔が都市を騒がす様になってからと言う物の、部活動の時間短縮と言う措置がこの学校では、取られて居たのだが。

「なら、帰りましょうか。」

「ええ。」

三人は、学校を後にした。車を学校に横付けさせる訳にもいかないので、彗の家の車は、校門から少し離れた所に駐車して貰って居る一希は、学校を出る前に、鞆の底板の下に仕込んだ拳銃を太もものホルスターに移した。

今までの状況から考えると、襲われるには僅かに時間が早い、油断をする積もりは無い。

P G Cである自分達に何時鉛玉が飛んできてもおかしく無いのと同様に、何時何が起ころうとも分からないのだから。

「これが家の車です。」

「……」

「……」

校門から僅か百メートル。其処にその車は停車して居た。

「えっと、お二人共、どうしました？」

啞然とする二人を見てか、彗は問う。

「……いえ、まさかリムジンとは思わなかったの。」そう。

三人の前に停車して居たのは、一台のリムジンだった。

当然と言っては何だが、運転手付きだった。

「お帰りなさいませ、お嬢様。どうぞ。」

「ありがとう。」

運転手が開けたドアから、彗はリムジンに乗り込んだ。

その乗り方は、明らかに慣れて居ると確信出来る程スムーズだった。

「これは……」

「流石に予想してませんでしたね。」

何があったとしても、対応出来る様に考えて居た二人だが、まさかリムジンが停まって居るとは思わなかった。

「どうぞ、乗って下さい。」

慧の招きに応じて、一希達は、リムジンに乗り込んだ。

中を見た目よりも広く、ゆったりしている。

シートも慣れれば座り心地は良いのだろうが、慣れて居ない今は、落ち着こうと言う方が無理だった。

三人が乗り込んだ後、リムジンは発進した。

路面が良いのか、車が良いのか、――恐らく後者だろう――揺れはほとんど感じない。

実は動いて居ないと言えば、信じてしまえそうだった。

「今日はお疲れ様でした。」

ある程度落ち着いたのを見てか、慧が頭を下げる。

「いえ、仕事ですから。…それに、まだ何か有った訳でも有りませんし。」

雪華が応じる。

「でも、お二人が居たお陰か、久し振りに安心して学校の敷地外を歩けましたよ。通り魔が現れてから、安心して街を出歩く事が出来なかったのです。」

「そうですか。なら、良かったです。」

「明日からも宜しく願います。」

「此方こそ。なら、明日ですが――」

雪華と慧が話し込み始めたので、一希は窓の外に目をやる。

そこで、気付いた。

「…どういう事だ」

一希に取っては、眩きとも言える声も、車内では、問い掛けも同然だった。

「どうしました、一希さん？」

「雪華さん。確か車を使用した帰宅ルートは、学校が有る中央プロ

ツクから、住宅地の南ブロック迄のルートだよな。」

「…そうですけど?」

「それがどうかしたんですか?」

どうした急に、と言わんばかりの二人に一希は窓の外を見せた。

「なら、どうしてこんな所を走ってるんだ。」

「え…?」

「何で…?」

中央ブロックから南ブロックへと向かって居るのなら、窓の外に広がるのは、住宅地か、オフィス街でなければならぬ筈だった。その筈が――

「何で、都市高速に乗って居るんだ?」

窓の外に広がって居たのは、騒音防止の灰色の壁だった。

「どういう事、ドライバー!」

声を荒げる替に返って来たのは、ドライバーの声と――

「すみません、お嬢様。こんな物が運転席に…」

一枚の便箋だった。

それに記されて居た言葉は――

『この車には爆弾が取り付けられている。爆破させたくなければ、時速七十キロで車を走らせる。これを違えた場合、この車は爆破される。又、外部に助けを求めたりした場合も爆破される。』

通り魔』

如何にも分かりやすい、脅迫状だった。



## 護衛一日目　く異変く（後書き）

本来、一つのパートにしようと思ったのですが、思ったよりも長丁場になりそうなので、二つに分ける事にしました。

急いだったので、誤字脱字有るかも知れませんが、ご容赦下さい。

先日、予告した通り、12月8日にタイトル変更致します。

新タイトル

『白紙の地図と高校生のPGC　くhalf red eyesく』  
です。

護衛一日目　く脱出く（前書き）

遅くなつて申し訳有りません。  
私用で忙しかったので。

## 護衛一日目　く脱出く

自称『通り魔』からの脅迫状を受け取った一希達は、リムジンの後部、その中央に設けられたテーブルの上に広がる道路地図を見ていた。

「どうしましょう?」

雪華が現在地を指差し、言った。

その声には、何時もの様に動揺は含まれて居ない。

今更ながら、爆弾一つことで慌てる様なほど、一希や雪華は一般人では無かった。

その所為か、車内には落ち着いた雰囲気が漂って居た。

「取り敢えず、このまま此処に居る訳には行かないな。」

今、リムジンは西プロックの高速道路を走って居る。少なくとも、今の所は。

勿論、車は何時までも走り続けられる訳では無い。

ガソリンが切れたら、走れなくなり、脅迫状が本当なら、この車は爆破されるだろう。

「取り敢えず、残りのガソリンの量次第だな。……鳥遊さん、後どの位走れますか?」

一希は運転手――鳥遊に声を掛けた。

「…この速度でこの量だと、持つて後一時間ですな。」

「一時間ですか…」

今では殆どの車はハイブリッド化されて居るが、元々搭載されて居たガソリンが僅かだったのかも知れない。

一時間と言う少ない猶予で、四人が脱出する手立てを考えなければならぬ。

「…ドアを開けて、周囲の車に助けを求めると言つのは駄目でしょうか?」

恐る恐る、と言った様子で慧が言った。

「駄目だと思います。多分、その事も考えてドアを開けた瞬間に……」  
「なら携帯で……」

「電波を感知されて爆破される可能性が有りますから、それも駄目だと思います。それに、」

雪華は一端言葉を切り、言った。

「脱出するにせよ、まず、周囲の車をどうにかしないと。」

前述した通り、此処は高速道路の上だ。

脱出しようとするれば、リムジンは、爆破されるだろう。

爆弾の威力が、分からない以上、周囲の車を巻き込む可能性が十分に有った。

「そもそも、爆弾は何処に有るんでしょう？」

「見たところ、車内には無さそうだな。」

リムジンに乗った時、一希はさりげなく周りを見たのだが、爆発物らしき物は無かった。

「もしかして、車外に有るんでしょうか？」

「まあ、どっちにしろ爆弾の時点で俺達には手は出せないけどな。」

銃火器の扱い方を知っている一希と雪華も、流石に爆弾の解除方法は知らない。そんな事が出来そうなら知り合いは居たが、こんな状況では意味を成さない。

正に八方塞がり、と思えたその時だった。

「皆様。」

鳥遊が、静かに言った。

「車が居ない所で有れば、ございますが。」

「……鳥遊。それは何処ですか？」

鳥遊は振り返り――勿論運転中、立派な余所見運転だ――地図の一部を指差した。

その指の先で差されて居たのは――

「これって……建設中の橋？」

「はい。」

誰もが言葉を失い、沈黙する。

「……其処には、どうやったら行けるんですか？」

「一希さん？何を言ってるんですか？」

いち早く混乱から回復した一希の言葉に、雪華と替は更に混乱する。唯一、ハンドルを握る鳥遊だけが落ち着いて居た。

「此処から直ぐの所に分岐点があります。其処を過ぎれば直ぐです。」

「其処に向かつて下さい。」

「……お嬢様。宜しいですか？恐らく、車は只では済まないと思います。」

沈黙の中、鳥遊は自らの主に問う。

「……構いません。この車に爆弾が積んで有る以上、最悪、爆破される事も考えてましたから。」

「承知しました。」

二人の会話が終わると同時に雪華が切り出す。

「……で、橋まで行っただとして、どうするんですか、一希さん？」

「さつきから考えて見たんだが、このまま車で走り続けるのも、爆弾を解除するのも駄目なら、やっぱり『飛び降りる』以外に無い。どっちにしろ脱出しなければならぬしな。」

「……時速70キロの車から飛び降りる曲芸が出来る人間が、この世界に何人居ると思ってるんですか？私や一希さんならともかく、二人はどうする積もりですか？」

無謀とは思えない脱出方法は、雪華を不安にさせたらしかった。

一希は落ち着いて答えていく。

「雪華さんはケースから銃を抜いて、背中に掛ければ後はうつ伏せの体勢でケースを下にすれば怪我はしない筈だ。」

高校に潜入する為に、雪華は狙撃銃を入れたケースを楽器ケースに偽装して居た。しかし、楽器ケースと言っても、外見だけで、その実態は、耐衝撃、防水、防弾と、ケースだけでもハイスペックだ。

まあ、中に入って居る銃を考えれば、ケースを用意した人間が、ケースにすら、気を配るのも分かるのだが。

「分かったけど、彗さんや鳥遊さんはどうしますか？」

「私は自分で飛び降りましょう。そのくらいの事は出来ます。…風見様。真に申し訳有りませんが、お嬢様を宜しくお願い致します。」  
「分かりました。なら古手鞠さんは、俺を下敷きにして飛んで下さい。」

その言葉に当然ながら、彗は困惑する。

人を下敷きに飛び降りるなど全く考えて居なかったからだ。

対する雪華は、まるで何も聞いて居なかったかの様に落ち着いて居た。

雪華は、そんな事位簡単に出来ると知って居たからだ。

困惑の表情を浮かべて居た彗は、二人の至って真面目な表情を見て、決心したらしかった。

「…なら、風見さん。宜しくお願いします。」

「喜んで、お嬢様。」

「…皆様、橋が見えて来ました。」

鳥遊の言葉に三人は窓の外に視線を移した。

全長一キロにも満たない橋が、直ぐ其処に有った。

工事現場のフェンスを突き破り、70キロまでのマージンを取る為に、リムジンは僅かに加速する。

「後、五秒です。」

橋は建設途中で、中央の部分が僅かに繋がって居ない。なので、飛び降りると同時に、下の河へ落とす事にした。

もしかしたら、ドアを開けた瞬間に爆弾が起爆するかも知れないが、其処は賭けだ。

「後、四秒。」

雪華が狙撃銃を背負い直す。

「後、三秒。」

鳥遊はハンドルを片手に持ち返る。

「後、二秒。」

雪華と慧がドアノブに手を掛ける。

「後、一秒。」

一希は叫ぶ。

「……今だ!!」

慧がドアノブを引くと同時に、一希は背中ドアを押し開け、飛び降りた。

制御を失った筈のリムジンは、事前に稼いだマージンを削って行き、見えなくなつた。

数秒後、激しい爆発音と共に、噴水が上がった。

「……重い。」

「重くないです!!」

建設途中の橋の上。

一希は慧の下敷きになって居た。

自分が言い出した事とは言え、こうして見ると結構無茶が有つた様に思える。

「すみません、取り敢えず降りて貰えませんか？」

束の間の開放感の後の……

「ぐふっ」

強烈な蹴り。

予想外の事に、一希は思わず本性で叫んだ。

「何しやがる!!」

「重い、って何ですか!? 重いつて!!」

「いや、思わず……」

そう言つた後、慧の表情が変わつたのは、一希の気の所為では無いだろう。

実際、その直後、再び強烈な蹴りが一希を襲つた。

『俺、何か悪い事言っただけ……?』

薄れていく意識の中で、一希はそう自問した。



護衛一日目　く脱出く（後書き）

コメント等、お待ちしております降ります。

護衛一日目　く帰還報告く（前書き）

お待たせしました。

## 護衛一日目　く帰還報告く

パサパサ、と言う音に目を開ければ、其処は何処かの、否、月下P GC事務所の古びた天井だった。

上半身を起こすと、蛍光灯の光が目にはみ入る。

「一希君、起きた？」

声のした方を見ると、其処には書類を捲る舞無が居た。

「…何で、俺事務所に居るんですか？」

「分からないの？」

「…はい。」

舞無は溜め息を吐く。

その姿は絵画の様だが、背景のひび割れた壁が残念だった。

「雪華が古手鞠さんを護衛して送った後、此所まで運んできたわ。

…報告を受けたついでに、何で気を失ったか聞いたら、『自業自得です。』って言ってたけど、何が有ったの？」

「いや…」

言葉を濁しながら一希は、一つ気になる事を見つけた。

「舞無さん。ドライバー…鳥遊さんは？」

「…ドライバーが潜ったけど、確認出来なかったらしいわ…」

「…そうですか。」

一希は、ボロボロになった制服のスカート…まだ着ていた…  
手を握り締める。

胸中を巡るのは、人を一人死なせた、否、殺したと言う慚愧の念。

その胸中を察したのか、舞無が呼び捨てた。

「一希。」

「…分かってる。」

『必要以上の同情はしない。』

あの日、目の前に居る少女に誓わされた言葉を思い出した。

「弱いなら、私の『刃』になれない。…それとも、貴方は…」

「心配無い。」

一希は寝かされていたソファから起き上がる。

「あんたは、俺の『鞘』だ。何時までもな。」

「なら、俺は帰るぜ。」

「その制服で？無理でしょ？」

「え？」

一希は制服を見る。

白の筈の制服は、埃等で煤けて居た。

「背中も破れてるけど。」背中に手をやると、皮膚の感触がした。  
見事に破れて居る。

「…どうするべきだと思う？」

「んー、そのまま良いんじゃない？」

「…何で？」

舞無は、背中を指差して言った。

「名誉の負傷見たいで私は良いと思うけど。貴方、たかが車から飛び降りた位じゃあ、怪我一つしないし。」

事実だった。

アスファルトとの摩擦で裂けた制服の下ーー皮膚は擦り傷一つ負って居ない。雪華が一希を病院に連れていかず、事務所に帰ったのも、それを知つての事だった。

風見一希は、生半可な事では、傷一つ負えないーーまるで化け物の様な人間だった。

「いつそ、明日から学校の制服を使っちゃ駄目か？スーツに似てるし良いだろ。」

「バレたら駄目と言う前提を忘れたの？駄目に決まってるでしょ。」

無論、一希はそれを知りながら言ったのだが、やはり駄目だった。

因みに、一希も舞無も裁縫は出来ない。

一希はそう言う事は、一姫に任せきりだし、舞無に至っては過去に一度挑戦した事が有ったらしいが、舞無は頑なに結果を話そうとしなかった。

と言うか、舞無は家事が出来ない。

「仕方ないわ、雪華に預けて帰ったら？」

雪華は、この事務所では唯一裁縫と家事が出来る人間だった。

舞無が今まで生きて来れたのは、雪華と一緒に同居して居るからだ  
と、一希は真剣に信じて居る。

「…そうしますよ。所で、雪華さんは何処に行ったんですか？」

一希はロッカーに仕舞ってある制服を取り出しながら聞いた。

「雪華？私に今日の報告した後、冷泉の所行ったけど。」

「…何時も思いますけど、あの二人は良く気が合うなと思うんですけど。」

「まあ、何処か通じる所が有ったんでしょ。」

そうこう会話して居る内に、一希は着替え終え、―――勿論、舞無の死角で着替えて居た―――鞆を持った。

日が沈み、このブロックが、変貌する前に帰るべきだろう。

身を隠す為とは言え、舞無と雪華の二人が、この事務所に住んで居て、無事なのは一種の幸運だと一希は思ってた。

まあ、二人なら誰かが襲って来ても、返り討ちにしそうだが。

「なら、俺帰ります。」

「制服は明日の朝早くに取りに来て。雪華に縫わせて置くから。」

一希は、事務所を後にした。

時は少し遡る。

まだ、一希が目覚めて居ない頃。

「―――爆弾？」

「はい。」

一希を持って帰った雪華は、―――正確には、事務所の前まで、古手鞠の家の別の車に送って貰い、階段だけ持って上がったただけだが、

舞無は知らない――舞無に報告をして居た。

無事潜入出来た事、古手鞠の印象、そして、帰宅の車に自称通り魔からの爆弾が仕掛けられて居た事。その爆弾で、一人の行方不明者が出た事。

「爆弾って…通り魔は刃物しか使わなかった筈だけど。」

舞無は机の隅に積んであった書類の一枚をヒラヒラさせた。

其処には、今までの犯行の遣り方が書かれて居る。

「前例がそうだったので、車と言う手段の方が安全だと思ったのですが…油断しました。」

「…雪華。本当に通り魔の仕業だと思う？」

「思えません。」

即答した雪華の右手は、通り魔からの手紙を持って居た。

「個人の車に爆弾を仕掛けると言う手口に、この手紙。今までの犯行の手口とは、全く違います。」

「なら、どう思う？」雪華から受け取った手紙を見ながら、舞無はこの推理を楽しんでいるかの様に顔を緩めて居た。

他者が見れば不謹慎だと罵るかも知れないが、此処には、雪華しか居ない。

そして雪華は、全くそう言う事を気にする人間でも無い。

人が死んでも、必ず人は悲しむとは限らない。

「私達が護衛に付いた瞬間に、こんな事が起こるのは、事情を知って居た人間が何かしらの形で関係して居る筈です。」

「となると、理事長？」

「それに限った訳では有りません。PMCの方から漏れたと言う事も考えられます。」

「難しい問題ね。」

溜め息混じりに舞無がそう言った時、設定初期の音で、雪華の携帯電話が鳴り出した。

「はい。」

『――』

「分かった。直ぐ行く。」十秒にも満たない通話を終え、雪華は携帯を閉じた。「爆弾の解析結果が出たそうです。今から行って来ます。」

「冷泉の所？」

「はい。ついでに銃の調整もするので遅くなると思います。何か有ったら連絡して下さい。」

そう言つて雪華は狙撃銃の入った楽器ケースを持ち上げた。ケースの片面は、飛び降りた時の摩擦で塗装が剥げて居た。

「気を付けて。」

「はい。」

雪華が事務所から出て行こうとした時、舞無は気になった事を尋ねた。

「そう言えば、何で一希君はこんな事になつてゐる訳？」

「心配要りません。自業自得です。」

そう言つて、雪華は事務所を出て行った。

「…何よそれ？」

静かになつた事務所で、舞無は呟いた。

護衛一日目　く帰還報告く（後書き）

最近、とても眠いです。

次は、多分雪華中心の話になるかと。



彩萌雪華と冷泉葵衣（前書き）

遅くなり申し訳有りません。

風邪をこじらせて寝込んでました。（現在進行形で寝込んで居ります。学校？出てますよ）

風邪には気を付けましょう。（引いた本人が言うな）

## 彩萌雪華と冷泉葵衣

普段ならば、事務所の窓枠に腰を下ろして居眠りして居るか、銃の解体整備でもして居るだろう午後6時過ぎ。

事務所で爆弾の解析終了の連絡を受けた雪華はバイクを中央ブロックへと走らせて居た。

第4都市では学生と言う立場ならば、免許を取る事は許可されて居ない。

だが、P G Cの社員ならば、仮に学生と言う立場でも、運転免許以外に、あらゆる免許を取得する事が認められる。

だからと言って、死傷者が多いP G Cの社員になる物好きな学生は数少なかったのだが。

とあるビルの地下駐車場にバイクを止めると、雪華は地下の入り口へと向かった。

入り口の側の詰所に居た警備員は、窓から拳銃片手に顔を出したが、近付いて来たのが顔馴染みの雪華と分かると、途端に顔を引っ込め、雑誌のパズルに再び取り組み始めた。

銃火器を所持して居るものの、顔を一目見ただけで、大したチエックもされず、あっさりパスされてしまうーそんな警備態勢を脆弱と取るか、余裕が有ると取るかで、物の見方は随分と変わって来るだろう。

雪華は全く関係無いと、考える事すらしなかったのだが。

ビルの中は、テロに因る制圧を恐れてか、異常な程に入り組んで居た。

そんな迷路の様なビルの中を雪華は勝手知ったかの様に進んで行く。階段を上がったり降りたりを数回繰り返し、何階に居るのかも分からなくなっただ頃――

雪華は、何も無い廊下の突き当たりで立ち止まった。事情を知って居る極々一握りの社員以外は、そもそもこんな所が存在して居る事すら知らないだろう。

雪華は財布からIDカードを壁に偽装されたコンソールに差し込んだ。

数秒の後認証が終わり、壁が二つに割れた。

その先には、とても人間の力では開けられないと一目で分かってしまう程の重厚な鉄の大扉が有った。

再び雪華はIDカードを差し込み、暗証番号を打ち込んだ後、小さなパネルに右の親指を押し付ける。

さっきよりも長い間が有った後、ピー、と言う音と共に大扉がゆっくりと開いた。

大扉が開き切ったその瞬間に盛大な爆発音が聞こえたが雪華は構わず歩を進めた。

厳しいセキュリティを通過した雪華の視界に入ったのは、白衣を着て忙しそうに動き回る十数人の男女。

「副所長！」

大扉を抜けて僅か数歩で雪華はその白衣姿達に囲まれた。

「お元気そうで何よりです。今日はどうなさいました？」

「葵衣から連絡を貰って来たんだけど。葵衣は？」

さっきの爆発音で、大体何処に居るかは検討は付いて居たが、念の為に雪華は聞いた。

「所長なら、多分実験室に居られますよ。」

「って事は、多分……」

「そうなりますね、お気を付けて。」

「有り難う。」

そう言っ、白衣を受け取ると、雪華は奥へと進んで行った。

実験室のランプが『使用中』を示して居るのを確認した後、IDカ

ードを使ってロックを強制的に解除する。ロックを解除された扉の隙間から漏れてくる空気には、僅かに火薬の臭いが混じって居た。

「葵衣居るー？」

「案外早かったね、雪華。」

雪華を出迎えたのは、白衣を着崩した同級生の冷泉葵衣<sup>れいせん あおい</sup>だった。

髪は切らずに放って置いた為にボサボサで、異常に長い。

背丈は雪華と同じ程度で、限り無く眠そうな目で、時間を持て余した、黒猫を思わせる。

きちんと身嗜みを整えればーーそうする確率は遥かに0に近いだろうがーー化けるタイプだろう。最もそうした所で、日頃彼女が行って居る行為の所為で、校内に於いて、彼女に人が寄って来る事は無いだろうが。

「またやってたの？」

「良いじゃない、芸術は爆発だよ。」

「だからって、気紛れで火薬に火を付けるのは止めた方が良いと思うけど。」

「此处で遣って居るのは、実験を兼ねた遊びに過ぎないさ。学校の連中は、私の事を『爆弾猫』（ボムキャット）と呼ぶけれど、あれは単なる部活動だ。」

「爆弾を作って爆発させる部活動が有ってたまりますか。」  
そう。

月下高校内に於ける冷泉葵衣の渾名は、『爆弾猫』（ボムキャット）。

その所以は、彼女が『部活』と称しーー一応、科学部の部長だーー校内で爆弾やら、火薬やら、『危険物』と名が付きそうな物を爆破する事に有る。

当然、文句を言う生徒も教員も居たのだが、全て彼女の言論の前に散った。

結果、彼女は忌避される存在となった。

そんな彼女と雪華がーー否、強いて言えば、月下PGC事務所が

関わりを持ったのは、僅か二年前。

誘拐された葵衣を葵衣の両親の依頼で、救い出した事が切っ掛けだった。

葵衣の家は、第四都市の銃器市場を独占する『冷泉銃工』で有り、葵衣は、社長令嬢と言う立場にも関わらず、今雪華が居る嚴重なセキュリティに隔離された此処――冷泉銃工試作研究所の所長を勤めていて、誘拐事件の犯人グループは、その試作品を狙って葵衣を誘拐したらしいが、そんな事は今はどうでも良い。

事件の後、葵衣は、せめてもの礼として、月下P.G.C事務所に、銃火器と弾薬等の供給を行って居る。

そして雪華には、研究所の副所長としての権限と、（気にしては居ないものの、只単に、話し相手が欲しくて、何時でも此処に来れる様にする為だろうと、雪華は思っ居るが）試作品の狙撃銃を譲渡したのだった。

その銃の調整等をして居る内に、救出対象と雇われ者と言う関係は友人と言う関係へと変化して居た。

自然と、雪華も此処だけでは、気を緩めて居たのだった。

「で、今日は何で来たんだっけ？『Wind』の調整だっけ？」

「呼び出して置いて良く言うね。爆弾の解析結果が出たって聞いたから来たんだけど。…まあ、次いでに此れの調整もしようと思ったのは確かだけどね。」

雪華は、狙撃銃の入ったケースを持ち上げる。

「ああ、そう言えばそうだった。なら、先に調整を済ましてしまおうか。」

はつきりした受け答えとは裏腹に、そう言う葵衣の目は、やはり眠そうだった。

スコープと連動したコンタクトレンズ型のディスプレイに、風向きや風速、距離、湿度、重力迄もが表示される。

それらの情報を確認しつつ、雪華は十字架を目標に合わせると、引

き金を引いた。

小さなマズルフラッシュと共に銃口から飛び出した弾は、正確に目標の真ん中を射抜いて居た。

その距離、1500m。

「何時見ても、ブレが無い。見事な腕前じゃないか。」

その声と共に、視界が再び、研究所の中へ。

当然、この研究所の中には、1500mもの狙撃が出来るスペースは無い。

その為、何時も雪華は、機械を使用し、仮想空間での調整を行って居た。

「そうでも無い。この銃も大きさの割には軽いし、扱い易いから。」

「謙遜する物でも無いさ。この都市に、プロだとしても、1500mもの長距離を狙撃出来る人間が、幾ら居ると思ってる？」

葵衣は紙コップに入ったコーヒーを雪華に差し出した。

雪華は、コーヒーに口を付けて「」噎せた。

「甘っ！？何このコーヒーとは思えない甘さ！？」

「甘い？結構控えたけど？」

噎せながらも、口に入れたコーヒーを雪華は何とか飲み下す。

「葵衣：角砂糖何個入れた？」

「四つ。結構控えめでしょ？」

「何処が控えめ！？せめて多くても二つでしょ？」

「え？私は五つ入れたけど？」

「論外！！」

角砂糖が四つも入れられたコーヒーは、本来の苦味を失い、最早『黒い砂糖水』とも言えるべき物体に変化して居た。

底には、溶け残った砂糖が黒く染まって溜まって居る。

幾ら葵衣が甘党でも、此処まで甘いと糖尿病になりたいと言って居る様な物である。

数分間に渡る論争の結果、雪華は、何とかコーヒーを淹れ直させる事を葵衣に同意させたのだった。

「で、爆弾の解析結果だっけ。」

声は些か不機嫌になっていたが、雪華が淹れ直したコーヒーに不満は無かった様だった。

その証拠に葵衣は、コーヒー（角砂糖二個入り）を口に運んで居る。パソコンの画面には、やがて爆破された車の3D映像が現れた。

「使われた爆弾はC4爆弾。正確な使用量は爆発しちゃったから分からないけど、車の底に貼り付けられて居た見たい。」

別のウィンドウが開き、恐らく爆破される前の爆弾の3D映像が現れる。

「使用爆薬と仕掛けた場所以外に分かった事は、予告通り70?以下になったら、起爆する速度制限爆弾だった事ね。ドアを開けても起爆はしない見たい。」

「その爆弾、一般人には…」

「無理ね。」

作れるの、と言う言葉を葵衣は切った。

「まず、この爆弾の設計図は、一般人には公開されて無いし、材料も一部特殊な物が有る。一般人じゃあとてもとても。」

「じゃあ、葵衣だったらどの位で作れる？」

「一時間、って所だと思う。」

「つまり材料が手に入って居て、設計図を知って居て、技術が有れば…」

「まあ、作れるでしょうね。」

「なら、これを見て。」

雪華は、逆瀬女子高の教職員リストを葵衣に差し出した。

「この中に、知って居そうな人は居る？」

無論、葵衣は逆瀬女子高の教職員等は知らない。雪華がリストを見せたのも、半分駄目元だった。

「まあ、調べて見るけど、あんまり当てにしない方が良いと思う。」  
「駄目で元々だから。」

「ふーん。…そう言えば、今回はどんな厄介事抱えてるのさ。」  
本来、P G Cの社員は、情報漏洩を防ぐ為、仕事の内容を話す事は禁じられて居る。

だが、雪華は葵衣にだけは、話すようにして居た。

葵衣は、研究所に引き籠り易い割には、中々頭が切れるのだ。

「……通り魔が爆弾、ねえ。」

「やっぱり、其処が気になる？」

「まあね。私の勘で良いなら、多分一筋縄じゃあいかないな、今回は。」

「それは分かってる。」

「それなら、良いんだけど。」

葵衣は、残ったコーヒを飲み干した。

研究所を出た二人は、話しながら、地下の駐車場に降りて来て居た。出口から見える外は、既に夜が訪れた事を告げて居た。

念の為に、チェックしたが、爆発物の類いは付いて居ない。

バイクのエンジンを起動させると、雪華は跨がる。

現在のバイクは、全て電気で動くタイプになっていて、音も静かなので、普通に会話が出る。

「なら、気を付けて。」

「バイクの運転に気を使う程、下手糞じゃないから。」

そう言つてアクセルを入れようとした雪華に、葵衣は言った。

「…やっぱり、見つからないよ…」

端から聞けば、何を言つて居るのか分からない葵衣の言葉も、雪華には当然の様に通じた。

「…絶対に、居る筈。第四都市には居ないかも知れない。…けど、必ず、この世界の何処かで、生きてる筈。だから…」

雪華は、何時も首に掛けて居る小さな写真入を胸の前で握り締めた。

「だから…探して。何時か、見つかる迄。」



葵衣の返事を待たず、雪華はまるで逃げ出すように、バイクのアクセルを入れた。

小さなエンジン音は、駐車場を出ると、聞こえなくなった。

…それを見送る葵衣は、気付いただろうか。

さっき迄、雪華が居た場所、其処に一滴の水が落ちて居た事に。

## 彩萌雪華と冷泉葵衣（後書き）

350アクセス突破しました。これからもよろしくお願いします。

### 次回予告

『月下舞無と過去の書類（罪）』 （仮題）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7675y/>

---

白紙の地図と高校生のPGC ~half red eyes~

2011年12月20日20時46分発行